# 教育勅語

四

へ 5
1217
4

へ5
1217
(4)

早稲田大学図書

同坊　　年生

六十翁　　曉月庵文白

夕月かすかく堤を松や浦の友

なさえ麻里布此塗等と　文白

年ふる縁お詩をおのけて　素江

門の新ありまその人なき　子敏

をかしかりしかりの乳房　未得

何不ふり拾て拾ふ拾子　雪吹

立信ゐるとて ゐるい流の 気くとも　蘆れ

お雲も流ひしに お雲よ載く　泊雲

ウ

一次の みし梅の 香 毎不 雪の 雪　遠く

ゐるく ゐるも 清の 山里　二晩

墨深の 京よ 味ゐ 立 武 思ひ　指月

拭 梅を 清の 古刀 ふるも　茶公

今ゐ ゐゐ 濁 清の 三 や 雪も　乗一

庭の ゐて ゐる 新 日　くや





深 ゐ 不 雪 ゐ れ 数 ゐ ゐ て　梅　青姫

机 中 ゐ し 一 又 送 り し 張　美 山

月 侯 の 神 北 霧 て ゐ ゐ ゐ る　吐雲

小 治 く く 治 不 清 し 寄　花旭

新 り し 為 ゐ ゐ 春 り 不 梅 清 治　中子

逓 利 ゐ ゐ の 酒 の 清 ん い　和風

初 む ゐ ゐ ゐ 移 不 ま ゐ 嘆 も　元多

解 ゐ の も 味 解 ゐ の も 凍　松月

二

篠霧も半分かゝる縄中か　杜子

豆殻歌く場座の外れ　とよ

うましくも風の立川はも雨の後　こち

それかゝ眺めやらん茶浮　和多

おもく居る猫の焼飯冷まされ　一香

湯気木十夕も露ある飯の声　塚洲

悲しく古月も川の尖るき　寄姫

お鍋居として袖に隠され　百柳

ち川くゝりと彼法界に侍り宮　色卯

まろかそとまふたく入相　松旭

語舟もなんかく瀬戸武潰されれ　松蔭

火を没て焚きし菜の下　三思

え彼いさせても月の御燃頃　琴二

いせ世の子稲もむしたく　ちよ

ウ

蔑もむしの秋とうされと　南素

すゝき篠かゝる市見えく　可香

世尾よ利て第の咒も　石室
一妻二ちんゝゝ弱ふく　柳岳
江川の深てもゝ流れてるなし　遠月
乳よりやく情の雅子　素文
大切ふれの入る角ちり　ゝよ
春ちよゝゝ新月の象　里石
ちて家北自れ亜こほれて　南河
角力のまゝ書表行り　柳破



戌吹成いの煙第ほんとも　南柳
ほゝ鉢よ和の樽ゝよ　光代
平第よ叶ゝ宝くむよ亦　樓呂
荷ゝ亦ゝ俳諧の行　志優
名源
ホよ亦ホ子ゝ岳服ゝ様の元　樓呂
ゆのゝ水半ゝ雪の象　素江
京切ゝ縁のゝ影ゝ一ゝホ　鬱也

竹のやうふかくてさくら枝の海　子叢
夕霧や其東さく初の蓮燈　逸く
柘榴し媚の月言北あるふ　鬼卯
水きのを深へきこえて春下雪　一茶柳
傳まて鳴ある一とせのおもふ　英之
伸月雲月ふく夜の蓮　豊水
聞しらるよりおもひの声　松月
乃きる時の源の蓮の郡　二嘗



鶯くの家ふきくるし接桐の家　有香
月も暮めて雲もうもれ月時　松美
蓮柳や形くゆる牛の角　三只
鶯を通ふ月もうもあり春蓮　逸月
むの寺もうく陽の月獨の夏　緑枝
咲くゆ弘の柳を月の家　蓼　源助
咲の鶯て男の家るきあるふ　柳居
夕三や咲くて尼の御庵り　志優

沖橋を沖へこえたる蓮ふね　芳丹
心字の池ふかく清水ふる　蘭甫
氣象して明るき青の水影の面　里松（ミワハ）
船の間ふ蓮をうてうをよ一茎ふ　桃雖
蓮をうて粉をよ作ふ男　女（ヨ）ちち
粉ふ知る時の窓やあのむ　こや
淺蓮ハうしふ流ふ巨燈ふ　さよ
蓮和の蓮和や池の蓮　ちよ

いく度も猫の上遠ふる蓮ふね　度柳
蓮しう流ふ蓮をうも帆の切赤　うよ
蓮火の灯しうて使うも老絶よ　きよ
川ふよ蓮ふ赤ハ行り小蓮よ　紫琴
を投ふ文をうてうる結鉢ふ　（ムラサキ）
蓮をうてを流ふ蓮ふ　蓮
蓮天ふ蓮ふ鳥やをを北蓮　雪花
蓮の蓮と傳ふ掃めりを夜の蓮　石雪
　　松旭

麦畑や神ふかき葉の茶の烟　少年素文

野よりて汁を煮ほす阪中哉　如竹

菊の中ゆく風よ哉なれ　吉二

菊物や笠かりかねる仕日土　金二

きりの上遠きを去てきこえぬ　和凡

渡し行る也拍子の吉凶　一瓢

三日の月沼ふ移るを牡丹　千里

阪迄来る時ゆけ詩うり吉の声　我笑



岸や蕨ゑを船の行もあり　思東

竹植て蛍の声此をふり　八十翁 花園

みち遠て寺と思ひて仏を拾　ナカ 美堂

この蛍と思ひふるゝや秋の雨　李一

詩ゝ哉蛍も吹ふて物の上　西柳

水植や家成仮けの庵せり　可文

垂蓮や寺行くの蛍ふりさ　調月

笠めんて手ふれや蛍り蛍　桃隣

後隆て年初をしる月哉　玄猪
竹刈て洗ひてをくや小春月　猪月
蔦やれの月ぬすみ行也　虫子
雪のにやきうるとめを事　梅子
洗濯のまかす月傍や年月哉　一茶
夜海やえん豆畑を　和水
雪のまふ念仏まもて旅の郎　雪吹
俳句ハ如雪月花をまぶ　雪作



夜雪やあれかぶる笠の音　曲雲
雪のそ地ふよ今ぬけ水ふ　青翠
天別雪川幅広し雪の雪　未好
年の雪やぬふ義の雪道し　雪旭
雪る厂の面成別て雪ふの風　曲河
雪と二ぬ月雪ふ月て暗雪ぬ　夕
ひつぬ下るれるしをの月　菜雨
年月雪ふ遠ふ雪の声　里石

鶴の毛て姿ほそる暁の小去水　孤二
比叡山の桑酒うしや秋の風　九多
紙も霧ものく初やゆの長さ　曉月園　支白

○

かうこえてうきさすふ遠の秋の蝶　牧人　李清
雪の夢ふ流星を蒙しこ堀ふ　口　居姫
草枯や月朝てうも弘の乙　口女　支路
遠咲くやれハ流るも湯りても　口　支亮



三夕侯　彩市連

紅葉ゆ笠ふ及ハ流ふり一ゆ　平生舎　素琴
炊く煙も夕美くの美　支左
孝切ハ毛ん中ふ流ふて　この諦
元旦ふ流ふるふ　破格
山陰ふ人の河月も見かふ　指月
源氏を　保坂雪を　秦　独子

特立の節逸して俗塵を離れ　一風
お妾も物と咲かぬ　梅の字
雲ちらして雲低く咲る　赤梅
きるのみと奇なる異なる　金秋
歳々一枝よりみな美も　一壺
あるとき世に千金の香　琴友

○

白素

梅よりもあるを忘れ咲梅の月　井楷
涼しうつりまるくれる　文左
梅まつ後の一家ふ是まて　芦舟
去ぬ人の字よりての友梅し　三翔
思ふ人を遊てゆるまつも　眺れ
来たのすしを声も色時　素白

○

三ッ物

梅ゆゑ春の夜の月をしるしるべ　聚松会系図

所能かなる湯ゝりの梅　文化

屋そのゝく若衆の手を指おくく　素兄

○

三ッ物　皎月亭梅寿

ひゝらぐゝ掛声ゝゝ沼太のゝ

むさゝしゝゝゝゝ水の影　文化

義向の弟八郎ゝを納めて　長流

久孫

焼しきも憂も動しゝ歌ゝゝ呉　切狂歌　可徳

十三の糸ゝゝの屋ゝゝ長ゝの雨　素琴

春雨に屋根成なやゝ竈　井楷

文月月や雲ゝ火燒ゝゝ東　楷月

走ゝゝし明ゝゝ后の月ゝゝ　琴友

去ゝゝゝ年味ゝゝゝ義　梅　梅宇

ゝゝ思むゝゝ高ゝ初　素白

三鞭　一風

京極　金秋

京藏　浦水

女　極子

極丸





里圓

くふ

京氏

京極家　極雪

破橋

芦舟

素光

一壺

月雪のこゝろあてはまるこの事　糸園
夢よみて鶯なき声や猫の恋　第七号　芝流

大野連

雉子鳴く
風葉や風哉力みなくの屋　方午園　入尾
鳴き鳴く浮しと此新　変化
鳴き鳴き鳴の後の浮ふて　釜月
ふる雪あの入ふれふる　柳枝

月雪ふる下も猫和泉の渡も　芙水
お撲ふるさんふるを庭ふる　里杜
利てふふ雪ふを撃ふ結ふて　尾花
吹結ふふを雪ふ吹新　芙泉
渡ふる志賀北郎も撲ふ沢　石糸
沢泥ふもふふる浮の夫　深く
新結ふふ芙雪て志ふ結　里秋
月渡ふふふ俄ふふふ　芙夕

行のう句は知れも銭の俳は杵は　拾く
青雲い登いりもをさ　走蛾
菓火きく埃りよ湯の角取中　乞流
沖のお面をあるを寂莫　一投
かくくを石切りまるは水の高　主青
別れ業をとるも意中　乗く
凡しくを取ゆりり北月も紙りまる　古俳
咲りう菓の高もるより　次戸



盛りりは山も所あるを形りよ拾てみり　拾里
まるを手子の行よるる　里湯
蝶繍とを咲こうをはの光さ　菓年
咲りるも夏　湯よ　山　李水
石塚
るりを成ふかりりは山や皐月義土　午秋亭　登月
帆よ咲るし浦の系夏や青宛　李水
絵の国よまをとるさよ意　堤　菓夏

[illegible]　高橋
[illegible]　松く
[illegible]　一枝
[illegible]　里遠
[illegible]　真寺
[illegible]　次戸
[illegible]　白糸
[illegible]　一瓢

[illegible]　柳枝
[illegible]　里松
[illegible]　里枝
[illegible]　糸く
[illegible]　里秋
[illegible]　尾花
[illegible]　義象
[illegible]　京保

庵の寺や雪を寸色の鶴くる　古津

又生とりのしかさ月ゆりを　荷兵

書こしてすみ手ちの秋の雲　故人　梅風堂

之垂て雲くらかす紙幟　雪鼠　桂里

中くふ鮎の国もの拍柳　保く

芳草やさめちの蒲の草　吳夕

松さしの白ちの下り夜　伊保衣　芳芳

書解や雪ふ和くふの寺　里夕



雪ふ和ふ和ふ和ふ和ふ　白二

ちくしの月及ちの東海　大阪里　湖く

大碕久賀浦

月涼し新も碎く海ふ陸れ　錦天園　桃水

渡ふも樓ふ文芳の月　文九

包まるふ和泉の蓮ふ　垂柳

拾ちぬ仏の切ち　く琴

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十日半り先よりのもり煙 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

和風
鳥夕
子に
浦松
花枝
[illegible]
山茶湾
北南

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うちつけて高砂の浦の春風に　自河
長年の里に住んとすれば　琴水
紅葉をたづねて山路に入る　宗秀
年毎の春を鶯のうたちり　凡止
偶ひの石の水中を見初めし　和川
まつかぜの絵めしを乗書　凡歌
見なれし初しの如ひとし　里翁
海の海をなほ遠き夜　文鶯

まつの葉うつり行く後の月　紀海
秋霧を分ける九重の裡　方秀
仮名かとうたを書こと入り浦　布山
枕よ寄れば眠り気の行く　河鶯
夢うつつ海にきのふ入りてるる　乗山
花まつる波の行ちうちく　梅江
枝をもれて月くる夕の浦しお　宗秀
寒さを忘れ清稽の声　琴松

衣添

雲りなき春の月かな三月青田かな　支考

春たつあけぼのゝ霞ゝ桜　伊賀　紀行

きて見るに香も匂ひて香のむ　口　友兎

春つゝあやもなき業のまれ　子仁

小松ふて雪ふる日の月　素堂

とくなり人に祝ふも月おわ祝　里圃

配る月のゝめ初ものゝ客ゝ　月歌

うゝ門ゝゝ月ゝ祝ゝて祝ゝ　東山

ゝ柳の春ゝ雪ゝ春ゝ雪ゝ　柳美

春ゝ雪ゝ降ゝ春ゝ雪ゝ　雪見

春月や春ゝ門ゝてゝうゝ雪ゝて春ゝ門　素堂

祝ゝうゝ春ゝ稽ゝ雪ゝ春ゝ祝ゝ雪ゝ春ゝ　三笑

出ゝ歌の春ゝて祝ゝうゝと春ゝ　馬夕

年ゝ何ゝ祝ゝを春ゝ門ゝ雪ゝの浦　紫湖

物春のゝ祝ゝうゝ春ゝ雪ゝ春ゝ麻ゝ門　浦松

川柳や夢の砌の新もゝ太郎　布己

ふれ流す又碧くさやる蓬ふる　冬葵

頃れの野ふ宮かるやえの月　金柳改　九州

起よくの月もふさよう書の己　和川

眠る船底ふかしの水鏡の友　与雪改　冬月

嘯て橋ふ文ふやえの月　素堂

和鏡や蓬くる程の夢やさ　旭南

行孔い数ふ麦育くい書ふ　岩尾改　里翁

月も西へ傾くおまの立ちふ　故泉

京ふて山ふ家ふ行ふ　可耕

家の枝新て月ふ月ふ故鏡ふ　琴孔

梦ふふて鳴ふ飯ふ　想古

橋かふ戸ふ月ふ　月江

夕立やさふぬ点ふ過地蔵　一瓢

猫のふ孔ふて飯屋の沿　梅江

鶯や家ふ砂ふ書ふ　文亀

白雲飛行月を吹き出す　少年　河東

うぐひす多かりし昔の声　女　まさ

月花に毎のしまぬきあてし　くら

年ごとに多のいきをつく長歌　や芳

時鳥月まちてなく　柳　きよ

夕立や豆腐の皮に月を見て　まり

屋ねさるのうしろ引る扇哉　ふか

笑ひんとして豆腐屋の扇哉　の女

雲の高も分てかふる雁の長、　ふり

朝〳〵出るく長き雨、　風止

年ごとに明く長き雨　茶牡

秋の月夜もふけて一つ村雨　梅秀

柳青々と弱のわかさ　和風

世話や鶯の鳴よりも上酒　琴松

を金ひく出て移あや青月夜　塚南

乙里の子も人別れ出みるる　ふ琴

綿貫や見わたすかぎりの雪ふる　北公園　蓮花

椋野連

遠近ふる月あらしの暮れ小　柳枝

風やみて　樹根ちらす　この秋　雪嶺

投てえし　碁の石　ある　雨　指月

碁の石に　苔や一月ふる　庭　如壹

この頃や　月の出ぬまを　雪ふる　波作

日高連

[illegible]　花插

独寝を　泣白　乳ふる　板橋ふる　孤雄

百寸ふる　傳　月土の　田植ふる　金亞

[illegible]　[illegible]　[illegible]　以定

[illegible]　[illegible]　[illegible]　桃後

外ノ人

八百素

[illegible]の用よ　雑　深くなる月さえふる　雲雀

寄せ来る風一重　夏九

居作者北堂と豪談を話さるる　素月

さわぐ浮やゆけんさ　龍北

一トせきり事独酒とも唯　和琴

時門畳よ淡る格況　一瓢

ちりとくも柏四月の丸窟　夕雪

見る行くて櫛よ色重　可矣

太郎



三月の八日行里や蕎麦の香　龍北

交てかゝる年ゝみ月又この花　和琴草

又る人のて忘特に案糸ちゝ　一瓢

行山い時雨よかゝく入日この面　可矣

遠て迷てのみ紅夫れ世　夕雪

野ゝゝ枝活ゝゝよ仏ゝゝ　素月

安下太

甲斐国 魯牛

[illegible]

峠寺鐘の声も遠近　文化

湖と乳房みせつゝ冬ゝ也　源月

[illegible]る繋へ猫の蓋　雷角

[illegible]月の義　[illegible]る義

招ちゝ冊也此の弾　必辞

[illegible]女房主婦へ廊へ[illegible]　文化

[illegible]月と　恵友

[illegible]の[illegible]の[illegible]　源化

[illegible]の[illegible]　[illegible]

[illegible]代[illegible]　佳[illegible]

[illegible]の[illegible]　雪牛

[illegible]

[illegible]柳[illegible]　[illegible]江[illegible]　源月

[illegible]の[illegible]　る義

[illegible]の[illegible]　文化

川狩や柳くろみて魚の骨　青蘭
梅桜二度の馳走や和尚様　龜毛
鯉の恋のぼるかと見れば流れけり
門の苔月の桜と眺ぶ　眠雷
桜又の度りも来れば来る　惠友
世界さへ新年の鶯の声　天々
ちがふあり故郷の雪や雲の峯　如破
高山やうりに紅の元旦さる　雪牛

はんのうに白ふかいの山や雪の梅　佳奥
秋風や杖をまつれて師の杖　魯牛

地蔵堂連

まくらとしぬ月さよ和尚　宇蓮
稲穂戸や杖ふて後ろ向て　慶乎
水楊枝深くもりし法ふかく　紀眉
ふちも洞て柳れ桜ふりの果　星桜
下戸さまの金ぐさ細ふ鶏ふ　尼自源

辻堂のうらふるのわれはわふ　牡丹
うてうてを剪をかしうる花　貢人　林言
梨籬卿の庵ふを亜や夕霧　徐表
稲妻や薄紙せうしの雪　於人　氏史
川紅の色ふをとふ今宵柳の風　口　風葉

沖京宮

霞かくる山のをうをや浪の月　二柱
遠湾

柳う青ふ垂糸引引て山京北　遠湾

大八ノ

ま白のうしやうれくふ蕊ふ移　白志

中宮

紅葉ちり一杯
夕汐ま寄る浦やはるくまぬ　新雪園　英湾

墨ち自然し梅雨くふ冬　文化
張て小ふ茶壺ふ蕊ふ元と身て　几桃

[illegible]
[illegible]
月七宮ふ二度の[illegible]
小雪の降れるうち折ふし徒
行幸下して至れる所[illegible]
[illegible]
[illegible]
逝よりのく清の引き[illegible]
咲ふ身をよ和らく世代と[illegible]

乃賞
梅五
来賀
志筆
南の
不芳
梨葉
この花

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゆくすゑの殷きりや篭り堂　志篠

青嵐ふきぬるこの頃　女

立琴やはもちゐくとも雷雨　梨雄